

「ビーチは好きかい？」とウォルター。

「もちろんさ。去年の夏のおれを見てほしかったよ！」

「きつと真つ黒焦げだったんだらうね」

「とんでもない、焦げたことなんかないよ。ただひたすら黒くなったんだ。どれくらい黒くなったかというと、ちょうど黒ん——」白人少年は口ごもって言葉を途切れさせた。顔を真つ赤にして、「相当に黒くなったんだ」とばつが悪そうに、ウォルターを見ずに、しどろもどろにいい終える。

気にしてないところを見せようとして、ウォルターはほとんど悲しげにかぶりをふりながら、くすりと笑った。

ビルは奇妙な目つきで彼を見あげ、「なにがおかしいんだ？」

「なんでもない」とウォルター。白人少年の長く青白い腕と、黒くなっていない脚と下腹部に目をやり、「べつになんでもないよ」

ビルは白猫のようにのびをして陽射しを受け、くつろいだ骨という骨に陽光が射しこむようにした。「シャツを脱げよ、ウォルト。すこし陽を浴びろよ」

「いや、遠慮しとくよ」とウォルター。

「どうして？」

「日焼けするから」

「ホー！」と白人少年が叫んだ。それからさつとところがって、片手で口に蓋をして自分